



第28回新熊本市史編纂委員会

新熊本市史通史編第3巻「近代I」・同第5巻「近代II」を発刊

同第5巻「近代I」・同第6巻「近代II」を発刊

市制百周年記念事業として昭和63年から15か年計画で取り組んでいた新熊本市史。その運営方針を決定する第28回新熊本市史編纂委員会（委員長 永野光哉・熊本日日新聞社会長）が、8月3日市内のホテルで開催され、平成12年度事

業報告のあと、平成13年度事業計画を審議・決定した。

編纂委員会に引き続いて新熊本市史通史編第3巻「近代I」・同第5巻「近代I」・同第6巻「近代II」の発刊報告会が開催され、永野委員長から後藤勝介・熊本市助役に発

刊本が披露された。その後、後藤助役から執筆者を代表して近代専門部会の池上尊義専門員（熊本大学非常勤講師）並びに近代専門部会の山中進専門員（熊本大学法学校教授）にその功績をたたえて感謝状が贈呈された。

新熊本市史編纂委員会の議事の要旨は以下のとおり。

●刊行物

I・同第5巻「近代I」・同第6巻「近代II」（以上詳しくは2・3・

新熊本市史編さんだより

12頁参照）、研究論文集「市史研究第12号」「新熊本市史編さんだより第19号」

※今回の通史編発刊で新熊本市史は全21巻22冊のうち、18巻19冊が完成。これにより新熊本市史は、平成14年度発刊予定の通史編2巻、別編1巻の3巻を残すのみとなる。

●史料収集

近世専門部会

三宅家文書、小笠原家文書、伊東家文書、藤井家文書、熊本大学附属図書館（永青文庫・松井文庫）、八代市立図書館（松井文庫）、天理大学附属図書館（橋村家文書）ほか

●史料購入
明治天皇紀（明治天皇の事蹟を中心とした編年体の史書）、肥後孝子伝（寛文から宝暦年間にかけて肥後藩で表彰された孝子の行状を編纂したもの）ほか
●刊行物
市史関係資料集第5集「熊本市正・昭和初期」、研究論文集「市史研究第13号」、「新熊本市史編さんだより第20号」

●史料収集
近世専門部会

市史関係資料集第5集「熊本市正・昭和初期」、研究論文集「市史研究第13号」、「新熊本市史編さんだより第20号」

近代専門部会

池田家文書、伊東家文書、熊本県酒造組合所蔵資料、国立国会図書館（佐々友房関係文書・安達謙藏文書）、国立公文書館（太政類典・

●刊行物
近代専門部会

新熊本市史通史編第3巻「近代I」・同第5巻「近代I」・同第6巻「近代II」（以上詳しくは2・3・

目次
第28回新熊本市史編纂委員会から 通史編「近代I」「近代II」の発刊に寄せて………
山田武甫の読み方について………
郷土研究をめぐる人々②………
新熊本市史展示室オープン………
市史トピックス………
PRのページ………

発行日
平成13年12月1日
編集・発行
新熊本市史編纂委員会
熊本市
(総務課市史編纂室)
〒860-8601
熊本市手取本町1-1
☎096-328-2038

新熊本市史通史編「近世I」の発刊に寄せて

近世専門部会 森山 恒雄

きました。なお史料不足による点については今後のさらなる研究を待ちたいと思います。

このたび、新熊本市史通史編第三卷「近世I」が発刊の運びとなりました。

「新熊本市史」では、近世の通史編は、二巻の構成として計画いたしておりましたが、記述する時代を天正一五年（1587）から慶応三年（1867）の大政奉還までとしております。これは佐々成政の入国から加藤期・細川期と大きく分けて三期にわたります。熊本の近世史においては、今回発刊の「新熊本市史」がおそらくこれまで県下で初めて試みられた大部なものでありますて、「一巻までをあわせますと2,000ページを超える内容を予定しております。

近世通史編の執筆にあたりましては、始めに通史としての形を整えるということを基本に項目立てをいたしました。今回発刊いたしました「近世I」では藩政及び武士・町人の生活等。次回発刊の「近世II」では在といいますか、いわゆる熊本市周辺部を含めた農村部

について記述するということでそれを構成したわけであります。

従いまして、以下でも述べますように、実際近世の熊本について執筆してみると、非常に研究が偏っておりますて、執筆を担当した近世専門部会専門員の皆さんには大変なご苦労があつたものと思ひます。

第一編「熊本城と近世政治の展開」では、近世初中期の政治、熊本の城下町、武家社会、藩財政、城下町の発展と政庁など、これまで「熊本県史」あたりでも取り扱われていなかつたり、全く研究がなされていない分野にも踏み込んで記述しました。

第二編「細川期の武士たちの社会と生活」では、武士の知行、そして武士の勤役と生活などをできるだけ明らかにしたつもりであります。これらも今まで全く研究が進んでいなかつた分野であります。このように、今回出来上がりました通史編「近世I」は、現在収集しうる限りの史料を用いてこれまでにない研究内容を盛り込むことがで

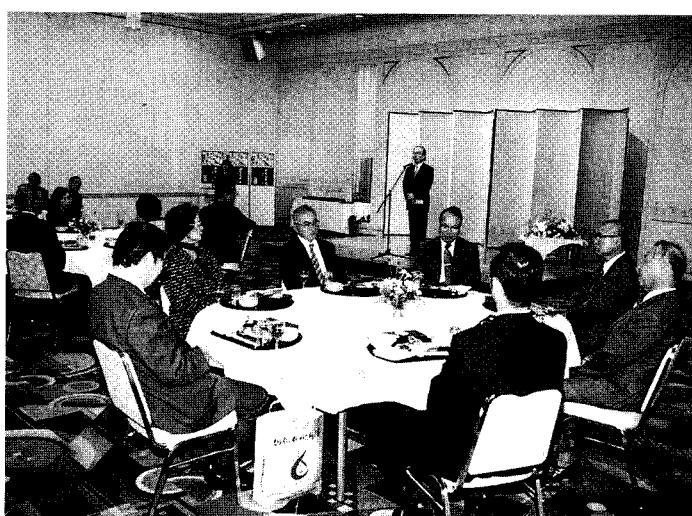
きるものを作ることに特に力を入れて記述いたしました。その結果、非常に興味深い内容が展開されています。この中では

化政期以降の城下町の変貌や町民たちの生活の様子がよくわかるようになります。

「近世I」の最後が第四編「城下町の人々の信仰と社会」とい

うことでの、特に中世から近世にかけての浄土真宗と日蓮宗の発展の状況を記述し、そしてそれが藩の宗教行政にどう反映されていったのかを明らかにしています。もう一つの特色は、初めてここでキリスト教関係を大部に取り扱っています。この他、修験道や祭祀関係についても記述しています。

このように、今回出来上がりました「近世I」は、現在収集しうる限りの史料を用いてこれまでにない研究内容を盛り込むことがで



第9回発刊報告会から

刊にあたりましては、多くの機関、団体、個人の皆様に史料提供等ご協力を賜りました。この場をお借りして感謝申し上げます。

広く市民の皆様方に読まれますことを祈念いたしますとともに、本書が、今後の熊本県史研究発展のための基本書として活用されることを期待して止みません。

新熊本市史通史編「近代Ⅰ」「近代Ⅱ」の発刊に寄せて

近代専門部会 前田 信孝

「新熊本市史」の近代通史編は、三巻刊行の計画で進行しています

が、このたび「近代Ⅰ」「近代Ⅱ」の二巻を同時に発刊する運びとなりました。

「近代Ⅰ」は、幕末から日清戦争前までを対象として「第一編 近代熊本の黎明」「第二編 明治国家の形成と熊本」の二編で構成し、「近代Ⅱ」は、日清戦争から大正政変前までの時期を対象として「第三編 資本主義の発達とその矛盾」「第四編 日露戦争と変貌す

る熊本」の二編で構成しました。

もちろん主題によつては大正初期にまで及んでいますが、二巻合わせて明治期における熊本の近代化の過程とその特質を重視して構成したつもりです。

今回の刊行に当たつて最も懸念したのは、計画どおりに通史編二巻の同時発刊が実現できるかどうかということでしたが、近代専門部会の八名の専門員が、それぞれの担当分野と主題についての執筆に努力したことはもちろんですが、



第9回発刊報告会から

佳・藤川治水・三澤純の四氏にも加勢していくだけ、また編纂室の職員の方々挙げての支援と協力を得て、ようやく発刊できる運びとなりました。

内容的には、先記のように、現熊本市域を主な対象として、明治期における近代化の進

展過程とその特質を重視して記述するように心掛けました。そのた

めには、熊本市域に生起した事象を、世界史・日本史・県史の動向

のより広い視野の中に入れ位置づけて

いくことが必要になります。もちろん執筆上の時間的・量的制約があり、主題によつては史料的制約もあって、過不足、濃淡もあると思いますが、このような企図をもつて構成し記述されていることに留意して、本書との対話を試みて欲しいと思います。

また、先記一二名の分担執筆によって構成された通史ですから、各執筆者の歴史認識の方法と内容が示されている点、論集的な性格をも合わせてもつており、したがつて、主題によつてはかなり高度な内容と論旨が記述されています。さらにまた、従来あまり研究されていなかつた課題についてもあえて主題を設定して記述していますので、その場合には、実証性を重視して分析し総合していく作

業過程に必要な多くの史資料が挿入されています。特に統計図表が多用されているのは、記述内容の実証性を重視するとともに、既刊の近代史料編に収め得なかつた統計史資料を補充する意味もあり、史料編とあわせて参考していただきたいと思います。

大要、以上のような企図と配慮

とによって構成し記述した通史ですから、かなり高度な内容と論旨が盛られている一方、これで十分というわけではありませんから、読者の理解に資するとともに、残された課題については将来なお研究を深めていただきたく、本書を記述するに当たつて用いた主な史資料・論文・著書などについては、できるだけ注記し、あるいは参考文献として掲げておくこととしました。参考にしていただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の執筆に当たつては、多くの機関・個人の方々の御教示並びに貴重な写真など史資料の提供をいただきまし。心より厚くお礼申し上げます。



東京台東区・瑞輪寺にある山田武甫の墓

私はかつて「市史編纂だより」第六号（1993年3月1日発行）に「山田武甫」の読み方について短い文章を書いた。そのなかで、「武甫」は「ブホ」と読むのが適当であろう、と書いた。というのには、1890年と思われる8月6日の山田が打った電文の原物（御馬下の角小屋蔵）が残っていて、それには片仮名で「ヤマダ ブホ」とあつた。はつきりと「ブホ」とあつた。ただ電文を見てすぐに「ブホ」と読んだからといって、それは確

山田武甫の読み方について

近代専門部会 花立 三郎

信をもつて主張したわけではない。

文字になつたものではあるが、原文が電文であるということが確信とならない理由の第一である。誰

でもすぐに思い付かれるように、電文はできるだけ短いものにしようとと思う。文字数によつて電報代

が違つてくるからである。山田もこの電報を打つにあたつて、なるべく短い電文をと考えたに違ひない。それで「ブホ」が浮かび上がつたわけであることは不思議でない。「ブホ」が不安であるというの

は、そのためである。何人かの方たちにお伺いしたが、いずれの方にも全面的賛成を得ることはできなかつた。理由は、やはり電文に根拠を置いているということであつた。しかし、私は「ブホ」という読み方が、山田本人の打電による電文であることに根拠を置いて「ブホ」と読むことにし

とすればどうなるか、という疑いが起つてくる。そうなると山田本人の書いたものだという根拠は失われることとなる。「ブホ」と自信を持つていえなくなるわけである。「ブホ」説は完全にあやふやなものになつてしまつ。

しかし、「ブホ」説はもう駄目だと投げ捨ててしまはないで、こうも考へられないだろうか。山田本人ではなく代人が打電したとすれば、その代人は山田の名前を書くとき、いつも言いなれている名前を書いたのではないだろうか。言ひなれている名前だけに、こんなときにすらすらと出てきはせぬかと私は考えた。すなわち、「ブホ」という呼び名は一般に広く呼び名されていた名ではないだろうかとされている。したがつて「ブホ」という読み方は決して間違いないといえよう。ただ正式にいう場合は「ブホ」は使わなかつたであつうと思われるふしがあるのである。

山田がジエーンズに出した手紙がある。米国プリンストン大学図書館に所蔵されているジエーンズの資料のなかにある、一通の山田の手紙である。ジエーンズ『熊本回想』（田中啓介訳、熊本日日新聞

社 1991年）の巻末に牛島盛

光編訳になる「キャブテン・ジエーンズ資料目録」がある。その目録

中に資料番号一一四として、山田

よりジエーンズ宛ての手紙があり、

日付は1875年9月となつてい

る。その手紙のなかで、山田はローマ字で Take to shi Ya

m a d aと署名している。すなわち「山田 武甫」である。このよう

に手紙の署名などには正式な名前

を書いたであろうし、わけて相手

がジエーンズとあれば正式に書い

たに相違あるまい。私としても山

田が自分で「タケトシ」と書いて

いるのであるから、これを否定し

て「ブホ」とする自信はないわけ

である。山田 武甫と読むことに異

論はないのである。

先輩乙益重隆氏からの教示に反対するわけではないが、かつては

なんとなく素直に従えなかつたが、今は乙益氏のご教示をありがたく

いたくものである。乙益氏はそ

のとき、これは確かに人から聞いたものだから信用できると思う、といわれた。「確かな人」とは荒木精之氏のことであろう。今にして思えば、この乙益氏の注意が正しかつたということになる。

手元に一綴りの私家版「明治の

政治家山田武甫」という冊子がある。著者は三野亮氏である。山田武甫の直系は謙次、それより武治一、靖治一、仁子と続くが、この冊子の著者三野亮氏は武治氏の甥にあたる。したがって亮氏は山田武甫にとつて曾孫になる。

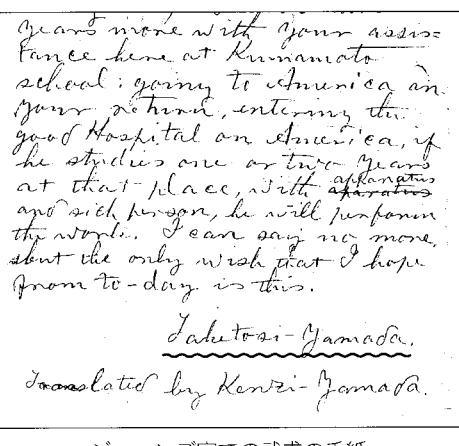
三野亮氏によつて山田の略歴をおれば、山田は天保二年（1831）一二月熊本県上益城（現在の上益城郡益城町）に熊本藩士数学師範役の牛島五左衛門の次男として生まれた。幼名は五次郎、兄は牛島五一郎。五次郎は山田家に入つて山田武甫と称した。山田は藩校時習館に学んだが、かたわら横井小楠の門下生となり、修身治人の学を学んだ。小楠塾で安場保和、嘉悦氏房、大田黒惟信、徳富一敬、竹崎茶堂、矢島直方らと親しあつたが、徳富蘇峰は「その莫逆にして互に知己の感あるもの」と弟子たちの親密な交わりを報じている。三野氏は、山田は「特に徳富一敬と親しく、小楠のよい高弟で師の心を以つて心とした人物であった」と感嘆しておられる。

山田は藩士の間探索掛を命ぜられ、志士のあいだに交遊して各藩の形勢動静を視察した。

王政維新となつて一時新政府の

役に就いたが、1870年（明治13年）藩政改革の中心となり、徳富一敬の協力を得て、改革の実績をあげた。71年には小楠の甥横井大平の建言を入れて、西洋人教師による純然たる洋学校を目指し、野々口為志らとともに熊本洋学校を設立した。山田は、当時一歳であつた長男謙次を入学させた。

しかし山田は、洋学校の受け容には積極的であり、文明開化には意欲的であつたが、キリスト教には反対で、洋学校の生徒たちがジェーンズによつてクリスチヤンになることは嫌つた。三野氏は「武甫の受けた教育が保守的であり、當時流行の洋学と結びついたキリスト教教育とは肌が合わなかつたことは理解される」と解釈してお



ジェーンズ宛ての武甫の手紙
(プリンストン大学図書館蔵)

実学党政権の崩壊後、山田は一時中央政府につとめたが、やがて熊本に帰り、教育や製茶業等殖産の道に尽力した。明治一〇年代に入り、自由民権運動が全国にひろがるや熊本の民権勢力の中心となつて改進党に属して保守勢力の紫渕会と対抗した。1890年（明治二三）の第一回衆議院議員選挙に当選して代議士となつた。第二回選挙まで当選して、第三議会では議長候補までなつて衆望を集めたが、93年2月23日、第四議会開会中に没した。六二歳であった。

蘇峰は、山田の主義は「自由平等」であり、「平和と人民と自由を愛した」と評した。

三野亮氏の「明治の政治家山田武甫」を興のおもむくままに読んでいたら、次のような文章に基づつて、山田は「たけとし」とルビをつけた。

うとしなかつた。積極的に聖書を読もうともしなかつた。親友徳富一敬は1907年（明治四〇）八六歳で海老名彈正から洗礼を受けた。山田はその一五年前没しており、徳富一敬と同じ道をふんだかどうかわからない。

徳富一敬と同様に、山田は一九〇七年（明治四〇）八六歳で海老名彈正から洗礼を受けた。山田はその一五年前没しており、徳富一敬と同じ道をふんだかどうかわからない。

徳富一敬と同様に、山田は一九〇七年（明治四〇）八六歳で海老名彈正から洗礼を受けた。山田はその一五年前没しており、徳富一敬と同じ道をふんだかどうかわからない。

最後に必要な資料をあつめてこの文章の執筆に協力してくださつた熊本市市史編纂室に感謝の意を表するものである。

新熊本市史ホームページを開設

新熊本市史編纂事業のあらましや刊行書籍、新熊本市史展示室などについて紹介しています。

また、当ホームページでは、電子メールによる購入申込みのサービスも始めました。どうぞご覧ください。

<http://www.city.kumamoto.kumamoto.jp/history/index.htm>



平野流香

明治の終わりから大正初期にかけて郷土史界に名を馳せた人々は、平野流香・後藤是山・中川井月等多士済々である。

平野流香（ひらのりゅうこう 明治一六年・1883～昭和二五年・1950）は、本名を乍と書いて「はじめ」と読む。しかし誰も正しくは読みず、講師紹介の時など「ながる先生」と言う人が殆どであった。御本人もいちいち訂正するのも面倒とばかり、どうせ「ながる」なら流の字を用いて号にしようと「流香」と名乗るようになつた。

東大の文科大学国文学科を卒業

したが、完全主義の彼は何度も原稿を書き改めたため期限を過ぎても完成の見込みは立たなかつた。印刷担当の大同印刷社長中山造酒夫はたまり兼ねて直接催促に出かけたが、両者は早く書け、出来ぬの一路を交わしたあと長時間唯無言で対座するだけで、立ち会つた後藤是山もこれにはほとほと困惑した。

結局この市史は一年遅れで昭和七年に日の目を見たが、さすがに平野が苦吟しただけあって当時としては全国屈指の市町村史の秀作とされている。昭和一〇年県教育会が「肥後文教研究所」を創設すると平野は当然のようにその所長に推举され、幾多の文教資料を発掘提供了が、彼の完全主義がそのままの継続を許さず、中途で挫折した。

後藤是山（ごとうぜざん 明治転車で姿を現わし」という記事が

彼は田迎村の素封家で庄屋の家であつたため家蔵の地方史料も多くの歴史的るものを見る眼も優れており、当時まだ高嶺の花であつた自転車を颯爽と乗りこなして気軽に各地に出かけた。「平野文学士が銀輪を輝かせて」とか「例の自

郷土研究をめぐる人々 ②

新熊本市史編纂委員会委員 鈴木 喬

しばしば当時の新聞に見えている。

熊本では九州学院・鎮西中学・県立中学校教諭を歴任したが、大正一〇年宇土中学が新設された時、教頭に抜擢発令されると教頭などになるのは嫌だと即日辞任して県の人事担当者を憤りさせた。

昭和六年の大熊本市成立一〇周年記念に熊本市が市史の出版を計画し、その著述を平野に委嘱した

が、完全主義の彼は何度も原稿を書き改めたため期限を過ぎても完成の見込みは立たなかつた。印刷担当の大同印刷社長中山造酒夫はたまり兼ねて直接催促に出かけたが、両者は早く書け、出来ぬの一

語を交わしたあと長時間唯無言で対座するだけで、立ち会つた後藤是山もこれにはほとほと困惑した。



後藤是山

一九年・1886～昭和六一年・1986）の本名は祐太郎で、大分県久住の出身である。久住は肥後藩領であつたため、熊本に出てことを父に切に要望され、九州日本新聞社（以下、九日）に入社した。社長の山田珠一は、国民党であつたが、改進系の徳富蘇峰とも親しく、後藤を徳富の国民新聞で研修させた。この時の縁で蘇峰・蘆花との交流が始まり、与謝野鉄幹・晶子夫妻との繋がりも出来、九日での是山の文学・俳句・郷土史等の活躍の源となつた。九日では主筆から編集長に進み、紙面の文芸欄を独立させて後々までそのスペースを確保した。当時新聞記者は署名記事には雅号を用いるのが例であったので、彼も『碧巖錄』の句に基づいて是山の号を用いていた。或る全国新聞記者の大会の

時、全国に名の知れた有力記者から九日の後藤是山という記者に一度会いたいとの話で面会したところ、開口一番「堂々たる記事を書いているから、さぞかし壯年の大家であろうと思つておつたが、案外の若者であつたのう」と誉められたのか腐されたのかわからぬ讃辞を頂戴したという。しかし以来九日の是山の名は全国に知れわたつた。

明治期に学問した人々の特色は、漢詩・漢文・国文学に熟達していることで是山もまたその例に洩れなかつた。特に和漢の文学と文学史並びに絵画の鑑賞では熊本の第一个人者であった。そのため九日紙上での連載記事は極めて多く、それによつて肥後の文化史は大きく発展した。中央から来熊する政府官僚や学者等の案内もほとんど是山の担当で、それによつて京大の浜田青陵・宮内省の増田宇信等の斯界の大家と接触して考古学への理解も深まつた。

是山と平野流香の交流は非常に親密で、平野は是山に懇意しんじよされるとき軽に歴史隨筆を連載した。その挿絵には済々賛の下林素光が熊中の甲斐青萍等の日本画家が筆を

そえた。

後藤は大正の頃、現在の水前寺

に地所を求め、我が家を持つこと

にした。解体移築した家は時習館教授敷孤山の旧邸であった。そこ

は、今では至極便利な場所ではあるが、当時は辺り一面の桑畠の中

に深い凹道が通じており、乗馬した兵士が凹道を走つてもその帽子

だけが見え隠れするほどの深さであつた。土地と建物は何とか都合

して我が物となつたが、庭は何もない殺風景な広場で売主からは転売するのではないかと疑われ苦慮

していた。

一日新居見舞いに訪れた平野が植樹をしてやろうと約束した。そ

の当日平野は十人ほどの庭師・植木職をつれて庭木を数台の車で運んできた。是山はびっくり、十人もの接待は田舎のこととて急場の間にあわない。是山が気にしてみると、平野はおやつから弁当・お茶までを後藤家の分まで整えてきており、是山には一切心配かけず

に一日で植樹を終えて帰つていった。この平野の心配りに是山は唯々感じ入るばかりであつた。

昭和九年山田社長がなくなると政党新聞の傾向が一気に強まり、

是山は九日をやめさせられた。し

かし同一〇年文教研究所が出来る

と、後藤はその所員に任用され、平野主任の下で職場を共にするこ

とに至つた。平野は同二年末に辞任するが、後藤はその後八面六

臂の働きをすることになる。

後藤は戦後も県の文化財専門委員となり、俳誌「東火」を主宰し、「西海時論」を発行するなどの活躍を続け、県文化功労者となり熊

本市制百周年には名誉市民に選ばれ、その旧邸と蔵書は熊本市の記念館として公開されている。

中川井月（なかがわせいげつ
明治一九年・一八八六年～昭和五一年・一九七六年）本名齋さい。そこで井月を号とした。家は代々細川藩士で、早くから漢学・国学に親しみ、武藤巖男や角田政治の薰陶を受け郷土研究に磨きがかかる。師

り、中川はその主任となつて奮闘これを完成した。たまたまこの年五高に赴任してきた鈴木登に出会

い、以降中川は鈴木と家族ぐるみの交際を続けることになる。

同年鈴木を会長として「熊本歴史研究会」（後に「熊本地歴研究会」）が発足すると中川は郷土史部

門の中核となつて会員をリードし、同会の玉名支部を設立して郷土史研究に新時代を開いた。戦後も研鑽に努めて出水の自宅で私塾を開いて後進を誘掖したことは有名である。

（次号に続く）

前号7頁中段の「肥後偉人伝」は「肥後異人伝」の誤植でした。
お詫びして訂正させていただきます。



中川井月

範卒業後文部省から優良校として推奨された高瀬小学校訓導となり

優良校として参観者が絶えないた

め余計に勉強に励むようになった。

しかしやがて校長になると、政党が廢止されたので玉名郡教育会は

『玉名郡誌』を編纂することにな

り、中川はその主任となつて奮闘

これを完成した。たまたまこの年

五高に赴任してきた鈴木登に出会

い、以降中川は鈴木と家族ぐるみの交際を続けることになる。

市史トピックス

●近代専門部会
通史編「近代I」「近代II」の発刊後、近代専門部会では「近代III」執筆のため、大正・昭和初期の資料を中心に収集を進めていく。収集資料から数点を紹介する。



明治 33 年の大洪水、安巴橋流失
(熊本博物館蔵)

甲斐青萍画「明治風俗図」

熊本博物館所蔵。今回収集したのは、「明治時代風俗図」8点（「特別大演習」「熊本城炎上」「山崎招魂祭」「日清戦争」「明治33年の大洪水」「明治天皇西巡幸図」「明治天皇大喪の日の熊本市内」「明治時代市民風俗」）である。

「近代II」の口絵および今回発刊のポスター、リーフレットに掲載した。当時の風俗、世相が感じられて大変興味深い。

どが失われた。
しかし、戦前熊本唯一の図書館
であり、戦後も資料を収集してき
た熊本県立図書館の所蔵資料中に

（二）で、甲斐青萍の経歴を博物館作成資料によつて略記しておく。
甲斐青萍（明治15年（昭和49年）は、御船町出身の日本画家で、本名は英雄。熊本で高橋廣湖に学び、熊本中学校から東京美術学校（現東京芸術大学）日本画科に進んだ。明治42年から昭和14年まで美術教師として熊本中学校に勤務。戦前は九州美術協会の中心として活躍した。有識故実と歴史画にすぐれ、馬と武者絵の画家といわれている。代表作は「菊池武朝奮戦記」。一方熊本の町並みを詳細に描いた絵や明治・大正期の熊本の風俗画など

も残し、貴重な歴史資料にもなつてゐる。

熊本県立図書館所蔵図書

戦前の公文書は、敗戦後、全国的に大量に廃棄処分された。熊本市も例外ではなく、特に六師団関係の資料は、防衛研究所に保存されているものを除いてほとんど残っていない。さらに熊本市にとって不運だったのは 6・26 水害である。大量の文書が当時の市役所の地下に保管してあった。それが水につかり、行政資料のほとんど

池田家文書

しかし、戦前熊本唯一の図書館であり、戦後も資料を収集してきは、当時刊行された行政刊行物や統計など貴重なものが残っている。熊本市では、「熊本県公報」「熊本市公報」などを図書館の協力を得て収集してきた。

今年度は、商業会議所関係、「熊本県常会報」「常会」（熊本市発行）博覧会に関する刊行物、また戦前の刊行物の復刻版（例えば国勢調査）などの資料を収集している。これらの資料は、新聞でしか伺えない部分を補強してくれる。今後も地道な検索によつて執筆に重要な参考資料が見出される可能性が大きい。

1、600点を借用し、整理中。ダンボール箱で約20箱、延べ明治～大正の当主池田伝次郎氏が、地域の有力者で、飽託郡会議員、黒髪村会議員を歴任していたため、関係の文書がある。薬、茶、蚕など産業関係の資料もあり、池田家の多彩な経済活動もうかがえる。また、奉公袋、絵葉書など当時の世相を物語るものも含まれており、今後、活用できる機会があると思われる。

近世史料調査（小笠原家史料返却）	1 · 19 16
第70回近代専門部会（通史編「近代II」の内容調整）	1 · 19 16
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	2 · 2
近代編集会議（通史編「近代」の内容調整）	2 · 6
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	2 · 10
近代史料調査（通史編「近世I」）	2 · 15
近代史料調査（通史編「近世I」の内容調整）	2 · 16
第71回近代専門部会（通史編「近代」の編集・校正・発刊について）	2 · 16
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	2 · 20
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	2 · 27
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	3 · 9
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	3 · 16
松井文庫マイクロ借用	3 · 17
近代史料調査（八代市立図書館・編集校訂）	3 · 17
第62回近世専門部会（通史編「近世I」）の内容調整	3 · 17
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	3 · 21
近代史料調査（本妙寺所蔵資料写真撮影）	3 · 26
近代編集会議（通史編「近代」の編集校訂）	3 · 27
近代史料調査（熊本大学附属図書館・永青文庫マイクロ撮影）	3 · 28
近世史料調査（県立図書館所蔵・検地帳マイクロ撮影）	4 · 6
近代史料調査	4 · 7
近世史料調査	4 · 11
近代史料調査	4 · 13
近世史料調査	4 · 20
近世史料調査	4 · 25
近世史料調査	4 · 27
近世史料調査（県立図書館所蔵・検地帳マイクロ撮影）	4 · 28
ふれあい出前講座実施（「新熊本市史」に見る熊本の歴史）	4 · 28

●近世専門部会

宗祇の連歌付句集「北国下向」

「新熊本市史」の刊行とその資料収集のため、市史編纂室近世専門部会では個人で所蔵している古文書の調査に努めている。一度調査させていただいたお宅から追加提供があつたり、新たな所蔵者をご紹介いただいた時は、調査がそのお宅にも役立ち、さらに市史編纂の事業内容をご理解いただいたものと喜びを感じる。「北国下向」と題された一冊も、以前に調査させていただいた市内居住の生駒氏より、この度市史編纂室にご提供いただいた資料である。

「北国下向」は宗祇の付句とされる155句を集めて、一冊にまとめたものである。飯尾宗祇は室町時代の連歌師で、將軍足利義尚の連歌の師匠となり、長享二年（1488）には北野連歌会所奉行となり、宮廷との関係も深い人物であった。

この資料の形状はタテ17.2cm×ヨコ11.8cmで紙数27丁。表紙は雲に山の織り柄のある絹布で包まれ、裏表紙には金箔が張られた豪華な装丁である。さらに同書は宝尽し文（もん）の袱紗（ふさ）に入るま、逃えの桐（とう）の箱に納められており、大事に所蔵されていたことが伝わる。

生駒家は同家の「先祖附」によ

ると尾張で蒲生氏につかえ、関ヶ原の役後は肥後熊本藩主細川忠利

と音信を持ち、寛永一四年（1637）の有馬の陣に御供し、卒新九郎の代になり細川氏に召し抱えられている。どのようなきさつから生駒家が「北国下向」を所有するようになつたかは不明である。

先祖より伝えられたものか、後代

が何かの褒美に賜つたものか想像

が広がる。同家では細川幽斎（藤

孝）の書として伝えられてきたと

いう。桐箱の中には本書と「北国

下向付句一冊 幽斎御筆無疑者

也」という平井正恒たる人物の一

紙が一緒に收められていた。しか

し「北国下向」には筆者の署名が

なく、平井正恒という人物が明ら

かでないため、書いた人物の特定

は難しい。連歌・細川幽斎の墨跡

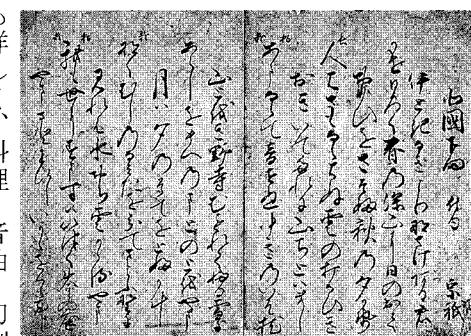
に詳しい国文学研究資料館文献資

料調査員の徳岡涼氏は、幽斎の筆

跡によく似ているとの感想を述べ

られている。

細川幽斎は近世細川氏の初代であり、熊本の初代藩主細川忠利の祖父に当たる。足利義輝に側近としてつかえ、足利義昭が京都から追放後は天正元年（1573）に織田信長の家臣となり、同八年には丹後宮津に居城を構えた武将であつたが、若くして和歌・連歌の秘奥を究め、千利休について茶道



付句集「北国下向」

「北国下向」の内容に関する、宗祇は本書の題のごとく生涯に越後へ前後七回におよび旅をしている。しかし「北国下向」という宗祇の付句集はこれまで未見のため、宗祇の連歌研究にも、幽斎の宗祇に関する連歌研究内容を知るために、極めて興味深い資料であるようだ。まずは徳岡氏が来春刊行の『市史研究くまもと』に「北国下向」全文を翻刻の予定である。今後どのように形で諸研究に活用されていく

9 · 5	9 · 5	9 · 3	9 · 1	8 · 22	8 · 11	8 · 3	7 · 21	7 · 10	7 · 6	6 · 30	6 · 15	6 · 12	6 · 6	6 · 1	5 · 29	5 · 25	5 · 24	5 · 22	5 · 16	5 · 11	5 · 29	4
近代史料調査（通史編「近世Ⅲ」の構成・項目について）																						
第63回近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容構成について）																						
第71回部会長会議（第28回編纂委員会への提出案件について）																						
近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容構成・依頼執筆・史料収集について）																						
第28回新熊本市史編纂委員会（平成12年度事業報告・平成13年度事業計画について）																						
新熊本市史通史編「近世Ⅰ」「近世Ⅱ」「近世Ⅲ」販売開始																						
近代史料調査（元熊本市戦後教育史編纂委員長河上氏・委員津田氏への聞き取り調査）																						
古町別館1階に新熊本市史展示室オープン																						
図書館・「熊本教育」史料収集（筑波大学附属用）																						

成立・発展

近代史料調査

くのか、とても楽しみな資料である。

村上家文書

領地である山城青龍寺・丹後・豊前小倉で抱えられたものも多く、その出自も様々であった。ここでは、今回新たに新熊本市史編纂事業で調査を行つた村上家文書（個人蔵）について取り上げる。

まず、村上家文書の全容は、近世期以前の史料が95点、明治期以降が182点である。特に永禄から寛永期（1558～1644）の史料が16点含まれており、この史料についても今まで全く紹介されたことがなく、今回の調査により存 在が明らかになった。

村上家は村上水軍につながる家筋である。村上水軍は南北朝から戦国時代にかけての瀬戸内水軍の一つで、主に伊予の能島、来島、備後の因島の三家より成立していった。村上一族のような水軍は、中世期における海上武力の行使者として海上支配権を持ち、通行船舶より通行税・警固料を徴収する権利を得ていた。しかし戦国期になつて各地での攻防に組み込まれ



小早川隆景書状

領地である山城青龍寺・丹後・豊前小倉で抱えられたものも多く、その出自も様々であつた。ここでは、今回新たに新熊本市史編纂事業で調査を行つた村上家文書（個藏）について取り上げる。

まず、村上家文書の全容は、近世期以前の史料が95点、明治期以降が182点である。特に永禄から寛

れ、豊臣秀吉の統一権力のもと天正一六年（1588）に海賊禁止令が出されたことで、村上家のようないい水軍一族は一大名となるか、特定大名の家臣団に編成されるか、百姓になるかのいずれかを選ぶかで、水軍としての活動は許されなくなつた。

①には、村上牛松（通総）感状・小早川隆景書状・佐世元嘉（小早川隆景の配下）・羽柴（豊臣）秀吉書状・井上春忠書状等があり、永禄期の筑前攻め、天正期の中国攻めに関わり村上家が戦国期の争いに組み込まれていく内容である。②は得居通幸書状と佐世元嘉書状で、当時の村上家の状況が伝わる内容で、細川氏の家臣となつた村上少左衛門の父であり、当村上家の始祖である村上越後とその孫についての記述がある。③は6点のうち5点が村上少左衛門に宛てられた書状で、松井興長書状からは村上少左衛門が豊前小倉で普請役をつとめたことが判明する。こののち細川氏の肥後移封に村上家は同行し、一時浪人した時期もあつたが、享保期以前には再び召し抱えられ、明治に至るまで細川氏に仕えた。

史料調査にご協力いただいた方々

(敬称略、順不同)

個人

富田富幸（坪井）、大川賢（土河原）、藤井武義（下南部）、村上史郎（新屋敷）、野田素明（本山）、生駒のぶ子（新屋敷）、和田雍子（東京都調布市）、徳岡涼（新大江）、中直文（八代市）、窪寺雄敏（新市街）、吉村圭四郎（川尻）、大村闘郎（長嶺東）、猿木恭経（東京都町田市）、永井富喜（横浜市）、河上良輝（黒髪）、津田清幸（江津）、田邊ミキエ（玉名市）

機関・団体

國立国会図書館、永青文庫、東京市政調査会市政専門図書館、高松宮ハンセン病資料館、熊本大学附属図書館、熊本商工会議所、新開大神宮、熊本県立図書館、熊本県立玉名高等学校、八代市立図書館、玉名市立歴史博物館、熊本市立図書館、熊本博物館、熊本市教育センター、河内総合支所、健軍小学校

9 · 14	9 · 13	9 · 11	9 · 10	9 · 8	9 · 6
近世史料調査（河内総合支所旧役場文書借用） 近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容構成・依頼執筆について） 第72回部会長会議（平成13年度経過報告、通史編「近世Ⅱ」「近代Ⅲ」の進捗状況） 近世史料調査（玉名市立歴史博物館・村上文書マイクロ借用） 近代史料調査（長嶺東・大村氏所蔵史料） 第72回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」執筆項目の調整、市史関係資料集について）					



明治時代風俗図・甲斐青葉画（熊本博物館蔵）

通史編 第3巻
通史編 第5巻
第6巻 近世I
近代II
幕末～熊本市の成立
日清戦争～大正初期

頒布価格 各4,300円

新熊本市史

第9回配本

好評発売中

「近世I」…天正15年(1587)の佐々成政入国から慶應3年(1867)の大政奉還までの約280年間を対象に、近世政治の展開や武士の生活、城下町に住む人々の社会や信仰などを詳述。

「近代I」「近代II」…幕末から大正初期までの熊本市域の歩みを、国の急激な近代化政策の中で捉え、その役割りや特徴を多方面から浮き彫りに。

新熊本市史刊行のお知らせ



わたしたちの郷土・くまもとの歴史がわかる
「新熊本市史」を市内主要書店でお買い求めください。書店がない場合など詳しくは、市史編纂室(☎ 096-328-2038)へお問い合わせください。新熊本市史ホームページ(<http://www.city.kumamoto.kumamoto.jp/history/index.htm>)からもご注文いただけます。

既 刊	通 史 編	第1巻	自然・原始・古代	5,000円
		第2巻	中世	4,300
		第3巻	近世I	4,300
		第5巻	近代I	4,300
		第6巻	近代II	4,300
		第8巻	現代I	4,300
		第9巻	現代II	4,300
		第1巻	考古資料	5,700
		第2巻	古代・中世	3,700
別 編	史 料 編	第3巻	近世I	3,700
		第4巻	近世II	4,800
		第5巻	近世III	4,800
		第6巻	近代I	4,800
		第7巻	近代II	4,800
		第8巻	現代	3,700
		第9巻	新聞上近代	3,700
		第9巻	新聞下現代	3,700
		第1巻	絵図・地図	10,300
発 刊 予 定	通 史 編	第2巻	民俗・文化財	5,300
		第4巻	近世II	平成14年度
		第7巻	近代III	
	別編	第3巻	年表・索引	